

Faculty Café

「教える」ことについて
語り合う場



coffee time

アクティブラーニングを経験して入学する 高校生を大学は受け止められるか？ —2030年(以降の)社会を見据えて—



溝上 慎一 先生

学校法人桐蔭学園 理事長

トランジションセンター 所長・桐蔭横浜大学特任教授

- 京都大学博士(教育学)、同大講師、准教授、教授を経て、2018年9月より現職
- アクティブラーニング研究と実践の第一人者
- 著書に『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』、『アクティブラーニング型授業としての反転授業』ほか多数

日時

2019年6月28日(金) 17:30 - 19:00

会場

早稲田キャンパス 3号館 7階 702教室

対象者

本学教職員

申込方法

参加をご希望の方は6月25日(火) 17:15までに、申込みフォーム <https://bit.ly/2EPZY95>よりお申し込みください。

主催

大学総合研究センター

(お問合せ先: ches-staff@list.waseda.jp)



早稲田大学 大学総合研究センター
Waseda University Center for Higher Education Studies

【詳細は裏面をご覧ください】

概要

2018年の学習指導要領改訂により、高校ではアクティブラーニング(主体的・対話的で深い学び)を授業に組み込んでおこなうこととなった。大学入試改革における記述式問題や英語4技能の導入も含めて、アクティブラーニングは必須である。大学へ入学してくる新入生の学習経験が大きく変わることをふまえて、大学の授業は彼らを受け止められるのだろうか。

また、大学教育でアクティブラーニングの導入が施策化されて(2012年の中央教育審議会の『質的転換答申』)、6~7年が経過しているが、この10年の全国大学生調査のデータから学生の成長がまったく認められないどころか、成長が落ちているとさえ見える状況がある。大学人はこの状況をどう受け止めるのか。アクティブラーニングは単なる学習法である。その先に見据えているのは、2030年(以降の)社会である。(教養・専門の)知識・理解だけではまったく不十分である。それを支える資質・能力、コンピテンシーの育成があわせて求められる。知識と能力は、いわば車の両輪である。アクティブラーニング(外化)をさせれば、両輪の程度はすぐさま可視化される。可視化はできているだろうか。当日は、全国の事例をふまえて、このあたりの話をする。

当日の流れ

Faculty Café 17:30 – 19:00

挨拶: 吉田文 先生

(教育・総合科学学術院 教授 大学総合研究センター副所長)

講演: 溝上 慎一 先生

(学校法人桐蔭学園 理事長)

質疑応答

懇親会 19:10 – 21:00

早稲田キャンパス 大隈会館1階 楠亭

申込方法

参加をご希望の方は6月25日(火) 17:15までに、申込みフォーム <https://bit.ly/2EPZY95> よりお申し込みください。

主催

大学総合研究センター

(お問合せ先: ches-staff@list.waseda.jp)



早稲田大学 大学総合研究センター
Waseda University Center for Higher Education Studies